前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション――宗教哲学とその基本問題

１．宗教哲学の歴史と伝統　２．理性と啓示　３．悪と神義論　（４．予定と自由意志）

５．形而上学と神

６．シュライアマハー　5/22

７．トレルチ　5/29

８．ティリッヒ　6/5

９．ブーバー　6/12

１０．波多野精一　6/19

１１．リクール　6/26

１２．研究発表１　7/3

１３．研究発表２　7/10

１４．研究発表３　7/17

１５．研究発表４　7/24

＜前回＞悪と神義論

（１）神義論とは？

１．「悪」の現実と「神」の実在

悪・不幸・罪といった否定的な現実の深刻さと、善なる神の実在との両者を同時に論理的整合性をもっていかにして主張可能かという問題は、しばしば神義論（弁神論）として多くの思想家が取り組んできたものである。

宗教哲学の根本問題の一つということができる。

３．近世哲学における悪論の系譜。

ライプニッツ　→　ヘーゲル　　本質主義？

カント　→　シェリング　　実存主義？

４．神義論：「どうして善なる神は悪を黙認するのか？」「有神論は論理的に自己矛盾に陥っている。悪の現実は神の非存在を帰結する」への応答・反論

Ａ：神は全能である。神は全善である。悪は存在する。

Ｓ：善者は自分ができるかぎりにおいてつねに悪を排除する。

（全能で全知で善なる存在者は、適切に排除できるあらゆる悪を排除する。）

全能者がなしうることに限界はない。

（全能者がなしうることに論理による以外の限界はない。）

↓

神は悪をふんだ世界を創造し、かつ、そうすることには充分な理由がある。

Ｑ：神は自分が好んだどのような可能世界でも創造できたのだろうか。

充分な理由とは何か。

５．John Hick

（２）神義論の二つのレベル

６．北村敏泰「苦縁――東日本大震災　死と生に寄り添う宗教者たち」

７．神義論の二つのレベルあるいは二つのタイプ

理論的と実践的（あるいは実存的）という二つのレベル

前者がいわゆる神義論。理論的レベルと実存的レベルとではその問題の「解決」の在り方が大きく異なる。

８．実存的レベル：悪・苦難・不幸に直面した人間のうめき、嘆き、恨みであり、そこから発せられる「神」への訴え・糾弾。

↓

この実存的レベルでの問いは、理論的なレベルでの論理的解決によっては満足しない。求められるのは、論理的とは別の形の解決、いわゆる喪の作業に比することができる。

これは理論の提示と言うよりも、気づきの促し・きっかけと言うべきものであろう。

これには通常一定以上の時間が必要になる。神の恩恵の贈与性に気づくこと。

９．この解決の仕方が人生を大きく異なったものとする。

恨みを抱えつつその実存の歪みを抱えつつ一生を終えるのか、あるいは痛みを残しつつも恨みの超えて生きて行くのか。

12．キリスト教思想において恨みの問い。アンドリュー・パクの議論

13．ハンナ・アーレント『人間の条件』: Labor / Work / Action（Speech）

活動の脆さ（frailty）：irreversibility / unpredicability

「赦しの力」（power to forgive）と「約束の力」（the faculty to make and keep promises）。

「この二つ能力は、共に多数性に依存し、他人の存在と活動に依存している。」（372）

「人間事象の領域で赦しが果たす役割を発見したのは、ナザレのイエスであった。」（374）

「約束の能力の安定力」「ローマの法体系が主張する、協定と条約の不可侵性にまで遡る」（380）、「契約論」（381）　　cf. 旧約聖書の契約思想

５．　形而上学と神

（1）キリスト教と神観念の複合性

１．絶対的なものとしての神と形而上学的思惟

・キリスト教とその神思想とおける、ヘブライズムとヘレニズムの二重性。

聖書の宗教とギリシャ哲学（形而上学）→キリスト教

２．ヘブライズムとヘレニズム

・19 世紀。キリスト教的伝統を構成する複合性についての意識。近代における、ギリシャ的近代的伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見。

マシュー・アーノルド：「ヘブライズム」（Hebraism）と「ヘレニズム」（Hellenism）の類型論。

水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」（武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社、一九八五年、二四―三四頁。）

・トレルチ「ルネサンスと宗教改革」:「それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言者的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである……この二つの契機はそれがたがいに緊張関係に立っていることによって、……将来においてもわれわれの運命となるであろう。」（トレルチ「ルネサンスと宗教改革」（1913）、『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、七四頁。（Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981（hrsg.v. Hans Baron, 1925）.）

３．キリスト教神学の形成過程

・ヘブライズムとヘレニズムとの緊張関係におけるキリスト教の成立。

キリスト教のギリシャ化（ハルナック）あるいはギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化。Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*,　Basil Blackwell, 1988.

（２）聖書の神と形而上学的神との緊張関係

４．ハヤ･オントロギア

・有賀鐵太郎：ヘブライズムとヘレニズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして論じた上で､キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ･オントロギアと説明。「ハヤトロギアとオントロギアとの間における緊張関係が問題とならざるをえない。私の言いたいことは、その何れか一方を切りすてることではなく、また両者の早急な綜合を求めることでもなく、むしろ両者の相異を認めながら、その関係を緊張関係、すなわちトノーシスとして捕えるべきだということである。」（有賀鐵太郎「神学的原理としてのトノーシス」（一九七三）『信仰・歴史・実践』（『有　賀鐵太郎著作集　五』）創文社、一九八一年、一八二頁。）

５．聖書の宗教と存在論的思惟

・ティリッヒ『聖書の宗教と存在の問い』（「聖書の宗教と存在の問題」『ティリッヒ著作集　第四巻』野呂芳男訳、白水社、一　九七九年、一九四―二五八頁。（Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality*（1955）, in: *Paul Tillich. MainWorks*.4,de Gruyter, pp. 357-388.））

・同書におけるティリッヒの基本的な意図は、聖書的思惟とギリシャ的哲学的思惟（存在論）との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で､「両者は究極的には一致し、相互に依存しあっている」（同書、一九四頁）事態を明らかにすること。

芦名定道「現代思想と〈神〉の問い――ティリッヒからジジェクまで」、
『理想』No.688、2012 年、理想社、40-52 頁。

・存在論的思惟の普遍性

広義の存在論と狭義の存在論（大林浩：存在論と存在主義。）

形而上学的ではない「存在」についての思惟の可能性。たとえば、日本の存在論？

６．聖書の人格主義(personalism)

人格：知情意の統一体（個別性）とコミュニケーションの主体（関係性）

聖書の宗教の徹底的な人格主義あるいは人格超越的な人格主義

・西谷啓治『宗教とは何か』（創文社、1961 年）

「近代的人間の立場がキリスト教からの乖離という方向を進んで来たということは、一体キリスト教のどういう点に問題があったからであろうか。そのことを、キリスト教の神観、特に神の超越性と人格性という点から簡単に考えてみたい」（西谷、43。一部表記を改めて引用）。

「非「人格的」な人格的関係、或は「人格的」な非人格的関係」(同書、47)

「上に挙げた三つの問題点は根本において一つに結びついて居り、そこから溯れば問題は更に神の人格性、従ってまた人間の人格性といわれる観念にまで及ぶ。」（同書、231）

・ティリッヒ：「存在論的な問いは、救済の問題のなかに内包されている。存在論的な問いを提出するということは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいう、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのご自身の否定である。」

（３）神の絶対性と形而上学批判

７．宇宙論的な強い神

・聖書の宗教と古代ギリシャの哲学的思惟→強い神と言うべき神概念の成立。

両者が宇宙論という枠組み共有していたから。

・ルドルフ・オットー『聖なるもの』（Rudolf Otto, *Das Heilige. Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Vethältnis zum Rationalen*, C.H.Beck, 1987（1917）.）

聖なるものの経験の原初的事態としてのヌミノーゼ。

ヌミノーゼが心情内に喚起する感情反応としての「戦慄すべき秘義」と「魅する秘義」の両極構造（二重内容）。イザヤ書六章のセラピムの歌。

合理化されることによって、怒りと愛という図式が成立。これは聖書自体の内部で始まっている。

↓

聖書の神：威力（しばしば非合理的な暴走する力となる）と知恵（「主を畏れることは知恵の初め」箴言一章七節）の両極性。

ユングのヨブ解釈（C.G.ユング『ヨブへの答え』みすず書房、一九八八年）

・「強い神」のキリスト教思想において多様な展開。

「無からの創造」論、宗教改革期の神の独占的活動性、そして二重予定説。

・キリスト教神学の学的前提としての古代ギリシャの哲学的神学の伝統の作用。

アリストテレス『形而上学』の「不動の動者」→「神の不可受苦性」の思想。

最高存在・最高価値としての神（最上級の神）の成立。

・西欧思想における神と人間存在の相関関係（一方における「神の像」、他方における投影理論）

明証的で確実な知の基盤としての近代的自我は全包括的で強力な支配者としての神との相関性にある。近代の世俗化は、絶対的な神との相関から離脱して自己に収斂する近代的自我の展開過程、またそれに伴う世界における人間の自己理解の変動にほかならない。

８．ハイデッガーの形而上学批判

・近代以降への歴史的状況の下での多様な宗教批判。

啓蒙的合理性の立場からの形而上学批判との連動性（フォイエルバッハからマルクス、フロイトへと展開する一連の議論）

啓蒙的理性とキリスト教的伝統からなる西洋世界（Abendland）総体に対する批判（ニーチェの宗教批判）

・芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第 24 号、2004 年、1-23 頁、「現代キリスト教思想と宗教批判――合理性の問題を中心に」『宗教研究』（日本宗教学会）、357 号、2008 年、227-249 頁。

・ハイデッガー『形而上学とは何か』「序論」（Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?*, Vittorio Klostermann, 1981（1950）.）。

Einleitung: 1949

WAS IST METAPHSIK?:1929

Nachwort: 1943

（ペゲラー：形而上学の根底への戻り行き→歴史としての形而上学→形而上学の克服）

・形而上学とは、「存在するものとして存在するものを思惟すること」（ibid., 8）であるが、それは、「存在するものを存在するものとして問うがゆえに、存在するものにとどまり、存在としての存在には向かわない」（ibid.）。したがって、「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」（ibid., 11）。この「存在するものと存在との混同」「存在忘却」（Seinsvergessenheit）（ibid, .12）において、形而上学は、存在するものの存在性（Seiendheit）を二重の仕方で表象する。

↓

一方では、存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において（存在論）、他方では、最高の従って神的なものの意味において（神論）。ここから、形而上学的思惟が狭義の存在論であるとともに神論であるという二重の性格、「存在―神論的本質」を有していることが明らかになる（ibid., 19）。

・キリスト教的西洋世界における思惟世界を形成：いわばそれ自体が、存在の「性起」（Ereignis）、「存在の命運」（Seinsgeschick）として生起した。

今や、ニーチェと共に、古代ギリシャを第一の元初（erste Anfang）とする形而上学的エポックは夕暮れにさしかかり、存在の命運は第二の、別の元初（andere Anfang）へと移行しつつある。

９．キリスト教思想と形而上学再考

・近代以降の宗教批判は、キリスト教思想に伝統的な神理解の再考を迫るものとなった。

しかし、形而上学はあらゆる意味で終焉を迎えたのかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み（たとえば、パネンベルクやプロセス神学）とが交錯している。

芦名定道「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第 25 号、2005 年、21-41 頁。

↓

・脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考とのいずれが真理か？

ハイデッガー哲学自体の真理性はどこで決せされるのか。

一つの自己完結的な思惟味世界（外部批判の排除＝免疫機構）あるいは言語ゲーム。

日常的経験世界（生活世界）という共通基盤。

↓

・キリスト教思想では、聖書的宗教という基準が設定できる。では、宗教哲学では？

（４）弱き神と聖書の神思想

10．形而上学批判と「弱き神」

・ハイデッガーから、ジャンニ・ヴァッティモに至る、解釈学的哲学の系譜。

形而上学批判＝伝統的な「強い神に対するいわば「弱き神」とも言える神概念の提唱。

・小野真『ハイデッガー研究――死と言葉の思索』（京都大学学術出版会、2002 年、244 頁注 5）、「ハイデッガーの「形而上学」構想における神性観においては、『宇宙における人間の地位』においてマックス・シェーラーが示した、「人間の共働なしには自体的に存在者はその規定に達することができない」、という神性観への共感が潜んでいる。ハイデッガーの言葉でいえば、人間自身が「神の共働者」となる「弱き神の観念」による触発によって、ハイデッガーの聖なるものの思索が表面化しているといえる。」

11．痛む神としての聖書の神

パウロの「ケノーシス」論（フィリピ 2 章 6-8 節）。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

キリストのケノーシス（「自分を無にして」「僕の身分」「十字架の死」「従順」）という視点からの神理解の再検討。

↓

モルトマン：「十字架につけられた神」の神学的意義、カバラの「神の収縮」の議論の神

学的意義を強調。（Jürgen Moltmann, *Der gekreuzigte Gott*, Chr.Kaiser, 1972, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr.Kaiser, 1985.）

波多野精一『宗教哲学』構想（波多野精一『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫）

遠藤周作：母なるもの、神の無力さ・沈黙

北森嘉蔵の神の痛み（痛む神）の議論：『神の痛みの神学』（新教出版社、1946 年（講談社、1981 年））

12．プロセス神学と比較級の神

・ハーツホーン：アンセルムスが『プロスロギオン』で神の存在論証のために提出した神概念、つまり、「これ以上大きなものが考えられない或もの」（aliquid quo maius cogitari non potest）をもとにして、「どうしても凌駕され得るとは考えられない存在」（the not conceivably surpassable being）という神概念を用いる。

「〈自分自身によって凌駕されうる〉ということから〈他のものによって凌駕されうる〉ことは推論できない。その上さらに、我々の全体性という観念は、〈自己凌駕〉（self-surpassing）が〈他のものによる凌駕不可能性〉とどのように結びつけられるかを明らかにする。」（Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967, p.20.）

・「これ以上大きなものが考えられないこと」＝「他のものによる凌駕不可能性」＝「自己凌駕性」（自分自身による凌駕可能性）という議論。

プロセス神学の神は、自らを越えてゆく神であり、その自己凌駕の過程で神も宇宙もより大きな真理と美の実現に向けて進展してゆく。これは、人間やそれ以外の被造物全般に自らとの共働を認めつつ、創造性の前進のためにたゆまず働く神。

最高存在・最高価値として完全性を完成させた神（completeness、perfection）、つまり、最上級の神ではなく、それに比べれば、力の弱い神と言わねばならない。この神こそが、預言者からキリストへ辿られる聖書の弱き神を表現するに相応しいものなのであって、しかも、単に弱いだけでなく、世界の全存在と共に苦しみ喜びつつ、最終的には宇宙の創造過程をより大きな真理と美と平和に導く。比較級の神。

（５）絶対性の新しい理解を求めて

13．強い／弱いの二項対立を超えて

「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」（第 2 コリント 4 章 7-11 節）

＜参考文献＞

１．茂牧人『ハイデガーと神学』知泉書館、2011 年。

２．Ｏ・ペゲラー『ハイデッガーの根本問題――ハイデッガーの思索の道』晃洋書房。

３．Otto Pöggeler, *Philosophie und Hermeneutische Theologie. Heidegger, Bultmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.